

今回は富山例会の勉強会を紹介します。

富山例会は日頃先生方がわからない事、治療をしても成果があまりなくどーしたら良いのか、疑問に思った事等を高橋先生を中心<sup>5</sup>になってやっている勉強会です。

## 顔面神経麻痺

高橋 克典

9月28日、野原英昭先生の紹介で末梢性の左顔面神経麻痺と味覚消失の患者さんが来院されました。発症後1週間目であったので、施術を開始し15回の施術で10月31日に完治した。富山例会の際、ケーススタディとして皆さんと勉強しましたので報告します。

顔面神経麻痺が中枢性(核上性)麻痺か末梢性(核下性)麻痺かを鑑別する方法は、眼を大きく見開いた時に顔に皺ができるかできないかで鑑別できます。前額筋を動かす上位ニューロンは左右の大脳皮質運動野から出て左右の顔面神経核を経由しているために中枢性の片側の麻痺では健側から信号が来ますので前額筋は正常に収縮し皺ができます。しかし末梢性の片側の麻痺の場合は麻痺側に皺ができません。中枢性麻痺の場合は運動野の障害かニューロンの走路での障害(たとえば被殻によるクモ膜下出血など)のため施術は難しいが、末梢性麻痺の場合は我々でも十分施術できる場合が多い。

それでは末梢性の麻痺について勉強してみたいと思います。

まず右図(ベッドサイドの神経の診かたより)で経の障害部位と症候との関係を説明します。

顔面神経核のある橋で障害されると顔面筋麻痺同側の外転神経麻痺や反対側の片麻痺が生じます。しては血管障害・腫瘍・多発性硬化症・ボリオなどです。

橋と延髄の境界部から神経が出てくる所で障害されると、聴覚・耳鳴り・めまいや角膜反射消失、小脳も生じます。原因としては小脳橋角腫瘍・聴神経腫瘍などがあります。

以上は末梢性(核下性)と言っても我々が施術する問題がありますので専門医に紹介する方がベター。

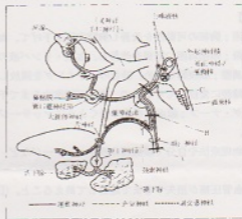
膝神経節以上の内耳神経管内(図のCの部分)での障害では、顔面筋麻痺のほか聴神経障害があると聴力低下、無いと聴覚過敏、涙・唾液分泌の減少、舌の前2/3の味覚消失が現れます。原因としては外傷、耳介を中心とした帯状疱疹(ラムゼイハント症候群)や炎症、腫瘍などがあります。

膝神経節から鼓索神経分岐部以上(図のBの部分)での障害では、聴覚過敏、唾液分泌の減少、舌の前2/3の味覚消失が現れます。原因としては外傷、中耳炎などの炎症、多発性神経炎などです。

鼓索神経分岐部より末梢(図のAの部分)での障害は、顔面筋麻痺のみです。原因としてはベル麻痺、外傷、炎症、多発性神経炎、ニューロパシーなどです。

茎乳突起孔より末梢での障害も顔面筋麻痺のみです。原因としては外傷、耳下腺の腫瘍や炎症などです。

以上は、西洋医学的診断ですが、さらにカイロの臨床では脳硬膜の緊張による神経絞扼、内耳神経管や顔面神



顔面神

以外に  
原因と  
があり

が生じ  
症状な  
腫瘍・

るには  
でしょ

経管内での伴行血管の緊張による神経圧迫や神経内循環の障害による虚血なども考えますが、実際はほとんどがそういった問題で生じているようです。

#### 【検査】

①問診：発症の状態（原因の有無、突発性か漸増性か）や顔面筋麻痺以外の副訴を詳しく聴取する。それから経過が重要である。発症後、日数が経過すればするほど神経がダメージを受けるため、麻痺が残ることがある。私は2週間を目安にしている。2週間以内に施術を開始できればまず完治します。しかし2週間以上経過した場合は麻痺が残ることがある。そして数か月経過したものは回復の見込みがほとんど無いようです。

②視診：顔面筋の麻痺の状態や耳介の帯状疱疹、耳下腺の状態を観察する。

③外頸静脈の緊張や血管の圧痛：循環障害があるかないかは外頸静脈の緊張や圧痛（耳の下・下顎の後ろ、茎状突起部分）の有無で判断できます。そして麻痺側に循環障害の症状が認められれば循環障害による麻痺と考えて良いと思います。

④頭蓋の触診：麻痺側に脳硬膜の緊張や縫合のジャミングがないかを調べる。また頭蓋骨の律動も調べます。

よって外傷がなく、中耳炎や耳下腺炎などの炎症がなく、帯状疱疹もなく、これと違った原因がなく突然発症した末梢性の麻痺はまずまず施術が可能です。中耳炎や帯状疱疹も循環を改善し免疫力を高めれば施術が可能ですので、外傷による神経損傷以外はほとんど施術可能ということになります。

#### 【施術方法】

①胸郭の施術：胸郭の可動性を改善し胸腔内圧を下げて、血液・リンパ液の還流を促進する。

②頭部の施術：頭部周囲の緊張を改善し、血液・リンパ液の還流を促進する。

③頭蓋骨の調整：脳硬膜を緩め、縫合のジャミングを開放し、頭蓋律動を整える。また顔面筋のアンバランスにより下顎が健側に変位してくるので、麻痺が回復するまで下顎骨の調整も続ける。

④ピッチング・ナープ：顔面筋を掴み弾くようにマッサージする。神経の刺激と麻痺筋の癒着や硬化を改善する効果がある。

⑤その他：物理療法や自分で顔面筋体操やマッサージなど

毎回、必ず血管圧痛が消失するまで施術して終えること。①②の施術を正しく行えば血管圧痛が消失します。

#### 【予後】

①施術開始から2～3週間はほとんど変化が認められなく、2～3週間を経過する頃から急に改善し、約1ヶ月前後で治癒する場合が多い。遅くても1ヶ月半位で治癒する。その時点で麻痺が残っている場合は後遺症と思われる。

②とにかく1日でも早く、1時間でも早く施術を開始し、神経を開放することが予後の好結果に繋がります。

③発症後の経過の長いものは、安請け合いないこと。

#### 【その他】

突発性難聴も脳硬膜による神経絞扼か内耳神経管内での血管緊張による神経圧迫が原因と思われるので同様に施術できます。またメニエル氏病もリンパ液・血液還流を改善すれば治りますので同様に施術できます。

## 黒部の勉強会

山田 隆司

皆様ご存じの通り、昨年5月から黒部例会では瞑想会を行っています。

「北・CHIRO」(2011. 8月号)ではヴィパッサナー瞑想について簡単に紹介させていただきましたが、続編として今後数回にわたり、より具体的に紹介させていただきたいと思います。現在参加されている方も参加されていない方も、軽い気持ちで読んでいただき、少しでも今後の参考になれば幸いです。

ヴィパッサナー瞑想とは何か

### (1) 編集される事実

ヴィパッサナー瞑想の最重要ポイントは、「心をきれいにすること(清浄道)」と「事実をありのままに観ること(如実知見)」、そして「法と概念を明確に識別すること」です。これらはヴィパッサナー瞑想の原点であるばかりでなく、原始仏教の根本的な教理に直結しています。この三点が明らかになれば、ヴィパッサナー瞑想と原始仏教の本質を捉えることができるでしょう。

まず、「法」という言葉の意味を定義しておきます。

法(ダンマ)という言葉は多くの意味を包含しています。まず、ブッダが説いた真理の「教え」や「教義」という意味があります。「標準」や「規範」という意味もあります。「諸法無我」と言えば、諸々の「存在」には「我」と呼ばれる不変の実体はないということです。

「法随観」では、ものごとの法則性や真理の観察と同時に、思考やイメージにサティを入れる仕事も「法随観」に分類され、この場合の「法」は「心の対象」という意味になります。つまりイメージや思考が「心の対象」として「法」と呼ばれるのです。

このように「法」には多くの意味があり、阿含(あごん)経の中には六十以上の用例があると言われるほどです。ヴィパッサナー瞑想の根幹に関わる「法と概念の識別」という場合の法は、「実在」とか「真実の状態」を意味します。ここでは、「法(ダンマ)」とは「真実に存在しているもの」、イメージや言葉は「概念」であり、「事実(実在)」と「概念」が拮抗し合っている関係になります。ムキ出しの「真実の状態」でありのままに認識されるものがダンマ(法)であり、その「法として存在するもの」の本質を見極めていくことがヴィパッサナー瞑想の仕事なのです。

こうしたダンマの世界と概念や妄想の世界が混同され、ゴッチャになった状態を「無明」や「痴(モーハ)」と呼び、諸語の根源と仏教では考えています。ヴィパッサナー瞑想を正しく修行するためには、まずこの「法(実在・真実の状態)」と「概念(イメージ・思考・妄想)」とを明確に識別する仕事から始めます。これが不明確のままでは次のステップに進めませんので、しっかり確認していきましょう。

### ＊煩惱は苦しい

まず、なぜ「心をきれいに」しなければならないのか。答えは簡単明瞭です。仏教とは、苦をなくすために説かれた教えであり、その教えを具現化させる実践法として提示されたものが「煩惱に汚染された心を浄らかにすること」だからです。

そもそも貪・瞋・痴の煩惱で生きていくこと自体が、苦しくありませんか。欲望を持てば、満たされるまでは苦しいだけだし、満たされなければ怒りやコンプレックスや絶望に陥ります。たとえば欲望が存分に満たされたとしても、妄想する心のシステムで生きているかぎり、心の「不満足性」は永遠に解消されません。どれほどの

お金を手に入れても、もっと欲しい、もっと上を目指したい、とさらなる欲が出て、振り出しにもどされます。理想の人と結婚できても、人も貴い地位や職業に就くことができても、満足感は一瞬にして崩れ、感謝すべきすべてのことが当たり前になって、新たな欲望が次々と生まれる「欲求性」と「不満足性」に苦しむのではないのでしょうか。

破壊したい、抹消したい、というネガティブな渴望に執われているのもドクッカ（苦）です。人を嫌悪し敵対することができなければ、怒りと恨みのエネルギーを抱え込んでいる本人が一番苦しいのです。自己嫌悪にまみれている時も、嫉妬に駆られている時も、不安も恐怖も、怒り系の煩惱の心で生きていること自体が苦なのです。

物理的な環境にどれほど恵まれていても、煩惱に汚染された心を浄らかにしなければ、心の苦しみから解脱することができません。逆に、どのような劣悪な環境の中においても、不平も不安もなく、むしろ自分を向上させるために天が与えてくれた最良の状況と心得て、淡々と受け容れていくことができるならば、ドクッカ（苦）はありません。心が浄らかであれば、どんな苛酷な運命の人でも幸福に生きていけるのです。

煩惱の不善心は思考のプロセスから生まれてきます。その妄想にサティを入れて手放していくヴィパッサナー瞑想は、「心を浄らかにしていく道」「心の清浄道」とも言われています。

### \* 思考を止める

ヴィパッサナー瞑想は、思考を止めて、事実をありのままに観ることができれば、一切のドクッカ（苦）から解放されるだろう、という理論に基づいています。苦の原因は妄想にあり、その妄想は一瞬一瞬の事実気づく「サティ」の技術によって止められます。思考が始まった瞬間、「妄想」「イメージ」とラベリング（言葉確認）されると、連鎖しようとする思考の流れが断たれてしまうのです。こうして思考が止まれば、心に入った情報が編集されたり歪められたりすることなく、ありのままに認知されるでしょう。ありのままに観られた事象は夢でも妄想でもない「真実の状態」なので、「ダンマ」と呼ばれます。

私たちの見るもの、聞くもの、感じるもの、知覚するものは常に誤解と錯覚だらけです。先入観や思い込み、早とちり、思考の編集、エゴの検閲など、諸々の心のフィルターがかかって情報が歪むのです。しかも、ダイレクトに、直接知覚されたものは情報に歪みがありません。「法」とは情報に歪みがないことです。

そして、その「法（ダンマ）」として存在するもの」の本質を見極めていくことがヴィパッサナー瞑想の仕事なのです。真実が洞察されると、間違ったものの見方で生きてきた「無明」に愕然として、苦の原因を手放すことができるだろうということです。知識を身につけるのも知恵ですが、仏教では、真実の姿を目の当たりにする意識状態こそが苦を乗り越える智慧であり、「如実知見」と呼ばれます。

### \* ダンマの世界と概念の世界

法と概念を識別するために、まず、事実が歪められていく様子を見てみましょう。

缶ジュースを開けようとして素足の上に直撃で落として「痛ーッ！」と叫んだ人がいます。夏の海辺の砂浜です。自分で落としたのだから、痛みを受容するしかありません。もしこれが他人に落とされた場合でも、痛みは同じでしょうか。喧嘩中の相手だったら……、ヤクザ風の怖いお兄さんだったら……、あるいはもの凄い美人が落としてくれたら……、痛みと怒り、痛みと恐怖、痛みと嬉しさがミックスされて、情報が歪まないのでしょうか。

誰が落とそうが、同じ重量の缶ジュースなのです。液体の入った缶が体表面に接触した瞬間に、電光石火の速さで「痛み」とサティが入れば、純粋な痛みのみで終わります。これは、痛みという事実が「ありのままに観られた」状態で、次に起こるはずの反応が止められているのです。怒りは出ません。嫌悪も恐怖も後悔も生じないのです。ヴィパッサナー瞑想を実践すれば、これは誰にでも体験できることです。見られたものが見られたままに止まり、聞かれたものが聞かれたままに止まり、感じられたものが感じられたままに止まるならば、苦しみが終滅する、というダンマの世界です。

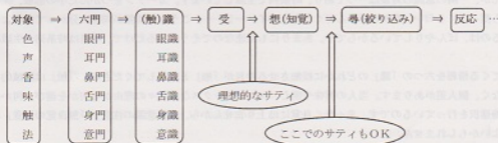
しかるに、普通の意識状態では、「痛み」と「痛みにまつわる嫌悪や恐怖」という二つの出来事が、同時に起きた一つのものとして認識されてしまうでしょう。心が事実を編集する瞬間です。すると、痛みの中に嫌悪や恐怖が内在しているかのような印象となり、それに対して激しく反応を起こしてしまうのです。

事実として存在しないものに対して、本気で反応して悪いカルマを作ってしまう愚かな状態を「無明」と言います。本質が見えない「無明」の混乱状態を解きほぐすために、「法と概念を明確に識別」していくのがヴィパッサナー瞑想であり、苦の原因である煩惱を止滅させていく作業になるのです。

「見る」「聞く」「嗅ぐ」「感じる」など、認知が成立していくプロセスのどこかで「真実の状態」が意識される瞬間があり、「心がまとめ上げていく妄想」の現れる瞬間があります。どのようなプロセスで法と概念が混同され、情報が歪んでいくのか、そして、どうすればそれは乗り越えられるのでしょうか。

## (2) 心が生まれる瞬間

ものごとが知覚され、最終的な認識として確定されていくまでには、厳密な認知の流れがあります。その認知のプロセスを、仏教では「十二処」の構造で説明しています。「対象」→「六門」→「(触)識」→「受」→「想(知覚)」→「尋(絞り込み)」→「反応」……という一連の流れです。この認知のプロセスを正確に理解すると、「法と概念」や「如実智見」などのダンマも、ヴィパッサナー瞑想の構造も明らかとなるでしょう。



## ★六門が捉える世界

認知とは、対象が知覚され、心に認識されることです。「認知」が成立するために必要不可欠なファクターが三つあります。「対象(情報)」と「六門(感覚受容器)」と「識」です。この三要素が矢印でつながる瞬間に、意識が生まれ、認知の最初のステージが始まります。なお、意識という言葉には、六識の一つとしての意識と、六識全体を統括する意識という二通りの使われ方がありますので、ご注意ください。

では、どのように煩惱が現れ、「如実智見」はどのようになされるのか、その後の展開を詳しく見てみましょう。

まず「対象」とは、知覚される外界の事物と脳内イメージや思念です。仏教用語で「色・声・香・味・触・法」と表現されるのは、感覚受容器の「六門(眼・耳・鼻・舌・身・意)」に対応しているからです。どんな生き物も、眼や耳などの感覚器官を使わないと情報が取り込めません。アメーバのように触角を頼りに対象認知をしている原初的な生物から進化し、人間の場合には六種類のセンサーを発達させました。「眼耳鼻舌身意」という六門を通して「色声香味触法」という知覚対象が心に入り、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識を発達させています。六種類の知覚対象と六門を合わせて「十二処」と言います。

仏教では、心が実体として水統するものとは考えていません。心とは「対象を知ること」と定義され、対象が六門を通して識につながった瞬間に生まれ、次の瞬間には滅し、滅した瞬間に次の対象が識とつながって生まれるというように、刹那に生滅を繰り返すものと理解しています。「あの人は根性が真っ黒や」と言いますが、悪をする瞬間の不善心が連続して生滅しているだけであり、また時には善いことをする善心が一瞬生じて滅することもあるのです。

#### \*眼や耳や鼻……で心が生まれる。

カーテンを開けた瞬間、一面の雪景色でした。雪に反射した光が眼球のレンズを通して網膜にぶつかり、情報として電気信号に変換され、視神経を介して後頭部の視覚野に到達すると、一群の神経細胞にインパルスが走って発火します。「対象」→「六門」→「識」が矢印でつながって「眼識」が生まれた瞬間です。

ここで重要な働きをしているのが「触（パッサー）」です。雪に反射した光が眼の門に届き、情報が電気信号に変換されて神経を伝わってくるところまでは自動的なのですが、そこで「触（パッサー）」が働くか否かによって、情報が「識（視覚野）」に伝達されるかどうかが決まるのです。注意が他の門に向けていれば情報はカットされ、「見た」という「眼識」が発生しないのです。百人の人が雪景色を見た瞬間、全員が同じように雪を認識するかどうかは分かりません。妄想している人、鼻歌を歌っている人、ガムを噛んでいる人たちは、雪が眼に入らないかもしれません。

もし、カーテンを開けた刹那、いきなり火災を報せる消防署のサイレンが鳴り響けば、耳を奪われ、強烈な音の情報が伝達されて、聴覚野の神経細胞が発火するでしょう。情報を脳神経細胞（「識」）にくっつける仕事をしているのが「触」なのです。

六門からは常に情報が乱入しています。意識は同時に二つの対象を取ることはできません。百万分の一秒かもしれませんが、一瞬の意識の対象は一つであり、時系列で生感しています。カーテンをつかんだ手の感触、味噌汁の鍋から漂ってくる匂い、次々と浮かんでくる考えやイメージ……。こうした情報が同時に分かっているような気がするの、ぼんやりしているからです。あまりにも高速なのでそう感じるだけで、本当は時系列の生感なのです。

乱入してくる情報を六つの「識」のどれかに接触させる役目が「触」と理解してください。「触」は機械的なものではなく、個人差があります。当人の興味や関心、コンプレックスなど諸々の理由から何かを選び、何かを捨てる取捨選択を行っているのです。まったく自覚には上りませんから、「無意識の注意」「無自覚の注意」と考えてもよいかもしれません。

熟睡を除き、私たちが生きているかぎり、膨大な数の情報が一瞬の間断もなく六門に乱入し、あるものは途中でカットされ、選ばれた情報だけが「識」にぶつかり、恐るべきスピードで意識が生感しているのです。

「ピン、ポーン」とチャイムが鳴れば、鼓膜を振動させた音の波が内耳の有毛細胞で電気信号に変換され、聴覚野に達して「聞いた」という識が生じます。これを「耳識」と言います。

漂ってくる線香の匂いの分子が鼻粘膜に触れると、これも電気信号となって伝達され、嗅覚を処理する神経細胞が発火し、「匂った」と香りが分かるのです。「鼻識」です。

角砂糖を指でさわっても味は分かりませんが、舌の表面でさわると甘味を感じます。舌の表面には「味蕾」というセンサーがあり、化学分子に反応して情報を脳に送り、甘い、辛い、塩っぱい、苦いなどの「舌識」を発生させるのです。

体表面には触覚・圧覚・温覚・冷覚・痛覚などのセンサーが分布しているので、固体であれ、液体や気体であれ、身体に何か接触すると「触れた」「痛み」などの「身識」が生じます。

五感の対象は外界に物理的に存在しますが、六番目の意門の対象は思考やイメージなどの脳内現象です。物が見え、音が聞こえるのが事実であるように、妄想や連想も「法」として現実には生じた事象です。だから意門に生じた出来事に「考えた」「イメージ」「妄想」とサティを入れれば、五感の対象とまったく同列の事実の確認になるのです。

以上が六門と六種の対象がリンクした瞬間に発生する、眼耳鼻舌身意の「識」です。

(続く)

お詫び：今回に山田先生の「黒部の勉強会」の原稿を私のミスで抜けているところが多々あります。今回は前回の  
と今回の原稿を載せています。まことに不慣れのもので先生方にご迷惑おかけしてどうもすいませんで  
した。

## ■勉強会のお知らせ

- |       |              |                   |
|-------|--------------|-------------------|
| ●富山例会 | 第2、第4金曜日22時～ | 高橋カイロプラクティック全尽堂にて |
| ●黒部例会 | 第3金曜日21時～    | みやざき接骨院にて         |
| ●金沢例会 | 勤労者プラザにて     | (問合せ：高橋克典まで)      |

## 会計からのお知らせ

今年度の年会費を未納の先生は納めくださるようお願いいたします。

## 編集後記

こんにちは！ 穴戸 るるみです。

もうすぐ今年も終わり近づいてきましたが、先生方の一年はどんな年だったでしょうか？私の一年は一言  
でいうと慣しかったかな～一人が二人になると楽しい反面、することが多くなるし自分の時間もなくなる  
し、眉間にしわができてしまったような…（笑）慣れない事ばかりで毎日がセカセカとしていました。来  
年は少しは慣れて気持ちにもユトリが出てくると思うので、勉強会にも参加出来るかも…（笑）

今年も先生方にしつこく原稿依頼をしましたが心よく？引き受けて頂きありがとうございました。来年  
も今年同様に原稿依頼をさせ頂きますますのでよろしくお願いいたします。（笑）

来年も先生方にとって良い年でありますように！